

東村純子著

『考古学からみた古代日本の紡織』

菱田哲郎

一 本書の構成と特徴

布をはじめとする織物の生産を、考古学分野から追跡することにはたいへんな困難が伴う。それは、生産用具や生産物の多くが有機質であるために腐朽しやすく、残存する資料に大きな偏りがあるからである。本書は、そのような資料の制約を、民俗例、民族誌や文献史料を用いて補いながら、東アジアにおける紡織生産をも視座に入れて、体系的な把握を試みたものとなっている。

著者の東村純子さんは、学部を京都府立大学で過ごし、京都大学大学院に進学し、自らの勉強を深めていった。その意味では、学部時代の教師である評者が本書を評する資格があるかどうかが問われることになるが、学部時代には文字通り研究の端緒を見つけたことに過ぎず、それをもとに大きな研究に織り上げていったのは大学院進学後のことである。ここでは、古代の手工業生産に関心を寄せる者の一人として、本書を評することにした。

本書の構成は次のとおりである。

序章 本書の目的と課題

第一章 紡織研究における視野

第一節 織物

第二節 紡織

第二章 糸をつくり、経を揃える

第一節 紡錘の基礎研究

第二節 鉄製紡錘の分析

第三節 柁

第四節 認めかけ

第五節 糸柁

第六節 柁・認め・糸柁の出現と分布の広がり

第三章 布を織る

第一節 原始機の経保持法

第二節 布送具と輪状式原始機

第三節 経送具と輪状式原始機

第四節 緯打具と輪状式原始機

第五節 地機

第六節 高機

コラム 民族例にみる輪状式腰機

第四章 古代日本と東アジア紡織技術の展開

第一節 東アジアにおける紡織技術の原初形態

第二節 中国大陸・韓半島における直状系の製織技術

第三節 日本列島における輪状系の紡織技術

第四節 日本列島における直状系の製織技術

第五章 律令国家の成立と紡織体制

第一節 古代紡織体制の研究

第二節 王権と紡織

第三節 地方諸国の紡織

第四節 律令国家の形成と織物

終章 総括と課題

以上の章立てをみると、糸を紡ぐ工程から製織工程の全体をカバーし、かつ原始機の登場からより高度な機の成立普及過程をトレースし、そして東アジアの中での位置づけ、および律令国家形成過程との関係を論じており、たいへん意欲的で体系的であると見える。また、初出一覧に示される著者の既出論文との関係は、「織物と紡織」(『列島の古代史』、二〇〇六年、岩波書店)が第一章第一節、第二章第六節、第四章第四節に分けられ、それぞれ加筆がされているように、それぞれの論文を解体し、新たな章立てに沿って再構成していることがわかる。そして、新たに書き下ろした部分も多く、豊富な図や写真を補って、わかりやすくすることに腐心している。このように、体系的な章立ての背景に、自らのこれまでの研究を再編成する努力があると言える。

二 輪状式原始機をめぐる

単に体系的な叙述がなされたことが本書の特色ではない。筆者はすでに「輪状式原始機の研究」(『古代文化』六〇巻一号、二〇〇八年)において、従来の原始機に対する見方を変する見解を明らかにしているが、本書ではその意義についてさらに検討を進め、新たな紡織史として提示することに成功している。そもそも出土織機は、部材である木器資料を見出し、それぞれの機能を民

俗例、民族誌を参照して考察することから、研究が進められてきた。その結果、従来は経糸を直線的に配し、織りあがった布を手前の布巻具で巻き取る直状式の原始機が想定されていたのに対し、筆者は布巻具とされていた部材が、凹凸一組となって布送具を構成すること、また足で突つ張って経糸のテンションを維持する板状の経送具の存在から、織りあがった布が前方に送り出される輪状式の原始機が一般的であったことを明らかにした。この方式は台湾をはじめとする民族誌が知られ、日本古代の例でも可能性が考えられたことがあったが、実際の出土資料から実証したのは、この研究が初めてである。そして、ミニチュアの祭具である群馬県上細井稲荷山古墳出土の滑石製の機の模型がこの輪状式の部材であることを見抜いたことから、弥生時代以来の輪状式原始機が古墳時代中期に継続することも明らかにし、出土した織機部材から七世紀までも存続する見通しを示している。出土資料から再現された輪状機の実像については、筆者自らがモデルとなって第五八図に示されており、たいへんわかりやすくなっている。

このような輪状式の機に対して、直状式の機は、日本列島では地機、高機の導入として現れる。地機を特色づける部材として経巻具をあげ、民俗例を参照して、地機特有の機能と経巻具の形状に相関関係があることを解説している。また開口具や緯打具も地機の民俗例と共通する出土織機部材が取り上げられ、地機の部材が出土する遺跡が五世紀以降の渡来系集落や豪族の拠点であることを指摘している。高機については、構造がより複雑になり、出土部材から特定することが困難となっている。その中で、機台に取り付けられる軸をもつ経巻具あるいは布巻具と考えられる資料が、

高機の部材として認定できることを指摘している。広範に存在が認められる輪状式原始機に対して、地機や高機は実例が少ないけれども、部材の見分け方が提示されたことから、今後の探索が広がることを期待できる。

日本列島の弥生時代から古墳時代に輪状式原始機が一般的であったことが明らかになった結果、さらに周辺地域との関係が課題となってくる。第四章では、中国大陸や朝鮮半島での輪状式原始機の存在を明らかにし、東アジアの中での普遍的な紡織技術であったことを想定した。検討の材料となった資料が少ないことは否めないが、輪状式原始機の広範な存在は疑いようがない。それに対して、機台をもつ直状式の地機や高機がどのように成立し、普及したかが大きな課題である。筆者は漢代の画像石や副葬用の模型から地機の存在を示し、高句麗の壁画古墳の例からも地機の存在について注意をしている。このような事例の蓄積は重要な作業であり、さらなる資料博搜が求められよう。

日本列島への地機や高機の導入も重要なテーマである。地機の導入が五世紀にさかのぼり、渡来集団が主導したことを考古資料から推論できたことが重視できる。文献史料では渡来系の呉織・漢織について記録があり、高度な紡織技術の渡来が想定されていたが、その実像が地機など、機台をもつ機の導入であったことが明瞭となった。他の手工業分野での技術導入の過程とも相似する現象であり、いつごろ、どの地域からといった課題について、さらに調べていくことが求められる。

新たな技術が振り入れられる一方で、輪状式原始機は七世紀初めまでみとめられ、可能性としては七世紀前半まで存続していた

と推測していることも注目される。異なる方式の織機が併存した理由は何なのか、生産する織物の違いなのか、新たな疑問が次々と湧いてくる。この疑問に答えてくれるのが、大化二年（六四六）正月甲子条の「改新の詔」に言及のある布についての記載である。第五章で述べられているように、輪状式の原始機がこの時期まで存続したと考えることから、「端」を単位とする布・絹が地機や高機で織られ、「尋」を単位とする麻布が輪状式原始機によつて織られていたと推測することが可能になる。尋の単位がその後には続かないことから、原始機の終焉ともリンクさせることができる。このように、律令制の税の基礎となった織物について、直状式の地機や高機による紡織技術に加えて、従来からの輪状式原始機による布もまた組み入れられていたことが示され、貢納制の実態を知るうえで興味深い。六世紀代の織幅が地機や高機と輪状式原始機で共通するという現象もまた、税制との関わりで理解されており、布という基幹物資の生産に関わる紡織技術の解明は、国家の形成過程を考える重要な鍵になることも痛感させられる。

三 糸つくりと整経の道具

以上、織成の過程を中心に見てきたが、本書は糸つくりから始まる長い工程を対象としており、その過程で用いられた道具に対する悉皆的な検討も大きな位置を占めている。糸によりをかける際の道具である紡錘についての検討のほか、よりをかけた糸を巻き取り、輪状の糸束（かせいど）の形にする道具である棒、その糸を保持し回転させて糸を引き出すための道具である認めかけ、そして認

かけにかけた糸を巻き取る道具である糸枠について集成的な検討をおこない、それらの消長を明らかにした。その結果、弥生時代中期には枠が現れ、総かけが古墳時代前期から普及することがうかがえ、糸枠は五世紀中葉から後葉に出現したことを確認している。このような出現の時期差は、人の手にかけた糸を引き出して糸玉をつくるという段階が最初にあり、総かけを用いてひとり糸玉をつくる段階、さらに糸枠を用いて小分けする段階へとというように、紡織工程の進化として捉えられている。織機の進化とは別に、紡織工程の変遷がたどれるようになっており、重要な指摘であると言える。最後の糸枠については、近畿地方に先に現れたのち各地に広がる状況が判明し、織機の場合と同様、新たな技術の一部としてもたらされたことが示唆される。そして、奈良時代になると糸枠の枠木加工に地域差が見られ、宮都においては画一性の高い糸枠が使用された実態を浮き上がらせている。

糸により糸をかける紡錘については、鉄製の紡錘の普及過程が重視できる。六世紀から七世紀前半は西日本の限られた場所で使用されていたのに対し、七世紀後半から八世紀にはほぼ全国的に用いられるようになり、なおかつ鉄製紡輪の画一化が進むことが指摘されている。宮都における糸枠の規格化が進む時期と重なっており、技術における規格の問題やその背景を考えるうえで注目できよう。筆者の研究の中では、この紡錘の研究が最初に取り組んだテーマであり、その後の製糸や織の研究の深化を受け、あらためて紡錘の変化を紡織史全体の中で問い直すことが求められていよう。

以上のように、時間軸上での展開過程とともに、列島内におけ

る地域差、中心―周縁関係など、紡織技術から明らかになる点はいへん多い。これらの事実が律令国家の成立とどのように関わるのか、第五章では、平城宮・京の状況、地方の状況を取り上げ、遺跡での紡織具の同伴関係などをもとに、紡織体制の編成のされ方を中心に議論を進めている。そして、紡錘や枠、総といった製糸に関する道具と、糸枠、織機部材のような製織に関する道具の出土遺跡を検討し、製糸製織を一貫しておこなう工房と、製糸と製織が分業しておこなわれる工房の存在を浮き上がらせることに成功している。後者の場合、総の状態で糸が流通したことが導き出され、考古資料ではまったく残らない糸束(総)の流通があまり出されたことになる。製糸、製織の各工程を丁寧に検証し、それぞれの道具について遺跡ごとの出土傾向を明らかにするという基礎的作業が、紡織生産の全体像を描く上できわめて重要であることが示される。

四 さらになる展開を期待して

本書の構成が古代の紡織生産について体系的な叙述を目指しているため、全体を見渡すことが可能となっているが、そのことから逆に十分にわかっていない分野もまた浮かび上がってくる。最後にいくつかの課題点について触れておきたい。

まず一つ目は国衙工房である。本書の第五章で触れられた国衙工房の内容は、文献にもとづく従来の見方が中心であり、他の部分で見られたような出土資料にもとづく分析はほとんどおこなわれていない。もちろん資料的な制約によると思われるが、他の生産分野でも国衙工房の成立が画期の一つとして認識されるように

なっており、紡織生産における国衛工房の実態解明が望まれるところである。

二つ目は、東アジアの中でも朝鮮半島との関係についてさらに研究の深化が求められる点である。地機や高機の導入について、朝鮮半島からの渡来人の役割が高いことが触れられている。窯業生産や鍛冶などの他の生産分野においても朝鮮半島からの技術移転が早くから知られ、道具レベルでの共通性が明らかになっている。紡織技術においても、朝鮮半島側の資料に対する検討を進め、彼我の系譜関係を明らかにしていく必要がある。また、糸舂や鉄製紡輪などの導入についても、東アジアの中での位置づけが必要となろう。

次に、本書が明らかとした紡織体制はおおむね麻布の製糸、製織過程を中心とするものであった。これは絹に関係すると考えられる地機や高機の類例が少ないことに起因していると考えられるが、さらに養蚕や絹糸、絹綿（真綿）つくりも合わせて議論することが重要である。筆者の努力によって輪状原始機存在はかたき鮮明となっており、紡織生産の基礎はほぼ明らかになったと言えるが、高級織物の生産技術については、一部の文献を除くとほとんど手がかりがないのが現状であろう。とくに布とともに律令制下の税の品目となる絹綿については、生産工程や生産用具の解明がまたれるところである。

最後に、手工業史の中での位置づけも残された大きな課題である。考古学から手工業へのアプローチは、製品や用具、工房などが残りやすいものを中心に進められてきた。窯業や鉄器生産、玉

作、製塩などがその代表例である。しかし、紡織生産は普遍的であるとともに現物貨幣としての役割もあり、税の収奪とも密接に関わっている。したがって、その展開過程が明らかになることは、他の生産分野の理解にとっても大きな影響を及ぼすことになるだろう。考古学による手工業史の構築に向けて、紡織生産を土台としてさまざまな分野の理解を統合していくこともまた、大きな目標の一つと言えるだろう。

いくつかの課題にも触れたが、生産技術の研究では、実際に復元してみることが重要な研究方法として確立している。その際に民俗例、民族誌を参照することもまた重要な意義をもつ。このような方法が随所にとられていることもまた筆者の研究の特徴であり、本書にはその成果がいたるところに散りばめられている。結果として、紡織という分野が、実験考古学や民族（俗）考古学にとつての格好の材料であることが示されている。このような研究の展開は、考古学を足がかりとしながら、紡織という分野において歴史学や民俗学・民族学を統合しようとする著者の意図にもとづいていると考えられ、本書では用語の整理など、統合に向けた基礎的な作業もおろそかにされていない。したがって、考古学を専門とする人はばかりでなく、広く歴史学や民俗学に関心をもつ方々に、是非とも手にとつて読んでいただきたい書物であることを、最後に付言しておきたい。

(B5版 x十二〇五頁 二〇一一年三月)

六一書房 税別三八〇円)

(京都府立大学教授)